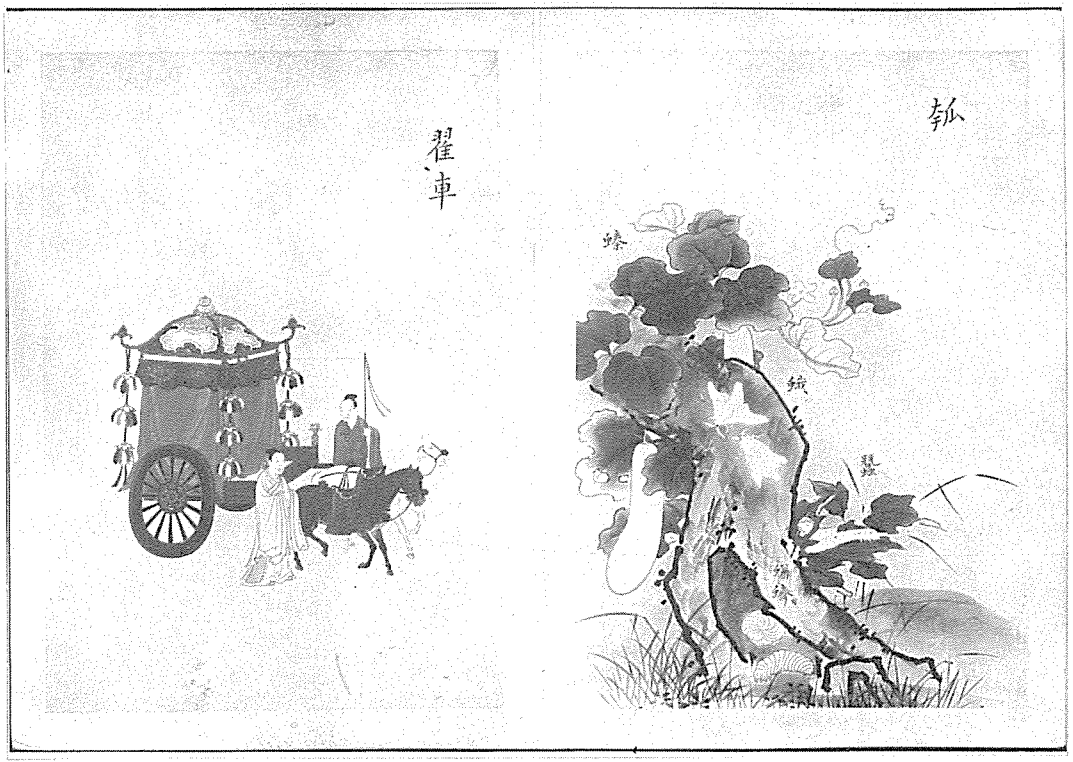
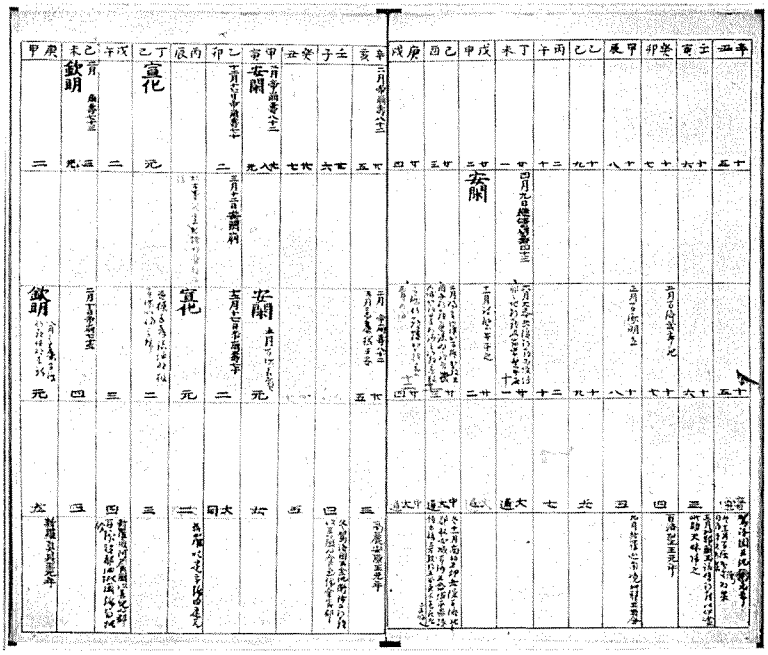
昭和五十六年十一月二十六日～二十八日

「新井白石旧蔵本」展示目録

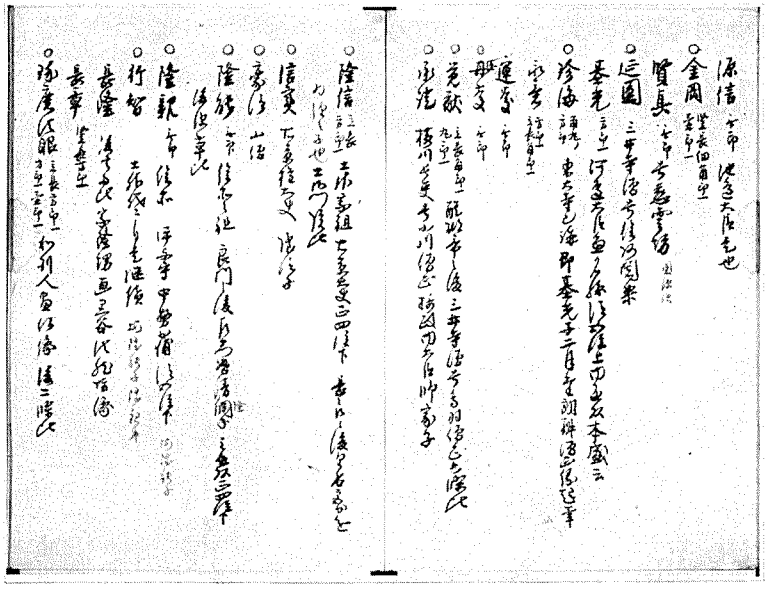
宮内庁書陵部



詩経図（展示本三八）



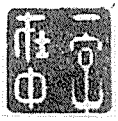
和漢年表（展示本 ≡）



画家系図（展示本 一≡）

7. 原君美印
（2 cm）

4. 君　　美
（2 cm）



1. 一字在中
（1.5 cm）

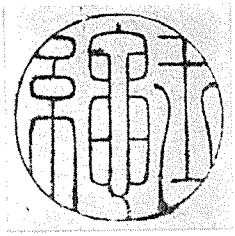
8. 源璵私印
（2.4 cm）

5. 君　　美
（1.5 cm）

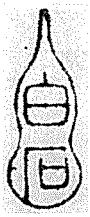
2. 躬自抄録
（2.4×2.1 cm）

9. 勿　　斉
（2.9×1.6 cm）

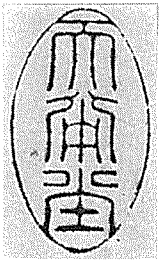
6. 源堪之印
（1.5 cm）



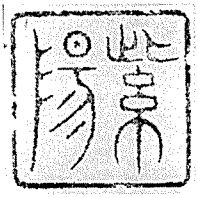
3. 玉　　繩
（3 cm）



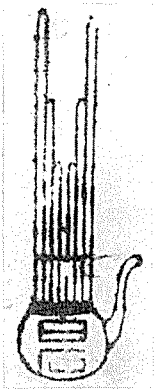
16. 白 石
(高2.8 cm)



13. 天 爵 堂
(3.4× 2 cm)

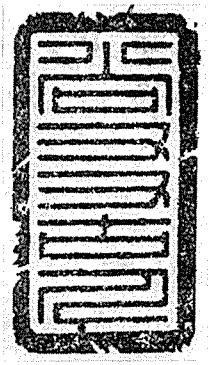


10. 紫　　陽
(2.5 cm)



17. 白　　石
(高5.1 cm)

14. 天爵堂図書記
(4.3×2.3 cm)



11. 尚友古人
(4.8×2.5 cm)

15. 白　　石
(2.9×1.6 cm)

12. 普　　伯
(1.7 cm)

新井白石旧蔵本

新井白石（一六五七～一七二五）は、甲府藩主徳川綱豊に近侍した儒者であったが、綱豊が六代将軍家宣となったため政治の舞台に登場し、いわゆる正徳の治を実現するとともに、有職故実・儀式典礼・歴史・地理・言語・詩文等に大きな業績を残した。白石関係の書籍として、当部には、明治一三年に新井家から献納された一七二部三四三点があるが、一部の識者を除いてその所在がかならずしも知られていない。ここに関連する図書を併せて三九部七五点の善本を選び、知見に供することとした。白石の著作（自筆・写本）、白石の収書（白石写・他筆）等で、個々については各項で触れるが、数項にわたるものについてここに摘記しておく。

一、徳川家宣と関連するもの。白石が師木下順庵の推挙で綱豊の儒員となったのは、元禄六年（一六九三）白石三七歳の時で、以後綱豊（宝永元年家宣と改名）が宝永六年（一七〇九）六代将軍となり、正徳二年（一七一二）薨ずるまで二〇年間側近として仕え、家宣が名君となるために進講した回数は、一二九九日におよんだという。展示本一・二・七～九・二〇・二七・二七・二八等が、白石の進講・意見具申などにかかわるものである。

二、関西歴訪関係。白石は、宝永七年、中御門天皇の即位式および同天皇の御元服式拝観のため一〇月二四日入京、一一月一一日即位の大礼を拝し、同月二五日京を立って大坂に向い、一二月二日大坂から奈良に入り、同月五日宇治に泊り、同月六日京に戻り、翌宝永八年正月元日天皇御元服式を拝し、同月二一日京を立ち、江戸に帰っている。その間八六日である。公家の典礼に関するもの四・六、収書に関するもの五・一四～一七・二一・二三等がある。

このほか、鎖国下における海外地誌等の収集・漢籍類の抄出等が目をひく。また、本目録に、新井家本に見える白石の蔵書印の集成（写真1～17）を附したが、掲出のほか「家多賜書」・「雲府図書之記」・「賜書永宝」・「紫陽太守章」・「門天俗客」・「井璵之印」・「名教中自有楽墜」などがあるといわれる。

なお、当部以外の関係書籍所蔵者は、新井家（『折たく柴の記』・『白石肖像画』他）・国立公文書館（『東雅』・

『西洋紀聞』他）・慶応義塾図書館（『新井白石日記』）・早稲田大学図書館・東京大学図書館・東京国立博物館・東洋文庫・栗田文庫等である。

白石、名は君美（きんみ）、はじめは璵。通称は与五郎・伝蔵・勘解由。字は済美・在中。号は白石、また錦屏山人・天爵堂・勿斎・紫陽等。父は正済。明暦三年（一六五七）江戸に生まれ、幼時から学問にすぐれた才能を示したが、父の不遇のため青年時代まではほとんど独学で過し、貞享三年（一六八六）三〇歳の時木下順庵の門に入り、のち徳川家宣・家継に仕え、従五位下筑後守となったが、享保元年（一七一六）八代将軍吉宗に忌まれて隠退し、同一〇年六九歳で歿した。

白石は、友人佐久間洞厳に宛てた書翰の中で、「とかく死し候已後、百年も二百年も後の人々の公論に身を任せ候より外無之候」と言っている。白石在世からほぼ三百年後の今日、江戸中期に生きた文人政治家の多彩な足跡の一端を、窺うこととしたい。

一　藩翰譜　　新井君美著　　江戸末期写　　一五冊　　二〇五・二九七

白石の代表的著作の一つで、正編一〇巻、附録二巻、凡例目録一巻から成る。慶長五年（一六〇〇）から延宝八年（一六八〇）までの一万石以上の大名諸家の事蹟を記したものである。元禄一四年（一七〇一）正月一一日甲府藩主徳川綱豊（後の六代将軍家宣）に命ぜられて執筆を始め、同一五年三月一八日完成、翌日綱豊に提出された。執筆の苦心は『新井白石日記』に詳記されている。書名は綱豊の命名によるもので、執筆の段階では「諸大名之家記」とか「諸大名家譜略」と称していた。記述は公平であると評価され、流布して写本も多く作成され、江戸末期には刊行もされている。展示本は新井家に伝存した写本であるが、享保元年（一七一六）室鳩巣の序をもつ流布本である。

二　読史余論　　新井君美著　　江戸中期写　　五冊　　二〇五・二八〇

本書は、正徳二年（一七一二）、白石が将軍家宣に進講した、武家政権の発展を中心とした日本史の講義案として著されたものである。その事情は、下巻巻末の白石の識語に、

右三冊、正徳二年春夏之間、坐を賜りて古今を論し」申セし時の講章の草本也　　源君美

此本書は懐にセしものなる故に、字細かにして見へわかち」かたかりしを、新川の平元成、やゝ字大きく見るに便」あるやうにうつセるを、亡息宜卿それによりてうつせし」ほとに、功終らすして身終りぬ、よりて家僮して補」写せしめ、是歳享保八年十一月十一日にうつし終りぬ　　源君美識

とあり、講義案であったものを門弟の土肥元成が「やゝ字大きく」写し、さらにそれによって末子宜卿（よしのり）が転写本を作ろうとしたが、功半ばの享保八年（一七二三）五月一四日、二五歳で歿したため、白石の門弟が補写し、一一月一一日に完成したものであることが分かる。なお、この時にもと三冊であったものが、上巻二冊、中巻一冊、下巻二冊の五冊に分けられたようである。展示本は、上巻第二冊目末に「源宜卿印」の方印影が墨で写されており、また中巻末にもその輪郭が写されていることから、ここまでが宜卿の功であったことを示し、識語の享保八年写本に

近いものと考えられる。なお、中巻末にも享保九年二月付の白石の長文の漢文の跋文があり、本書起草の眼目および上掲の識語と同内容がくり返されているが、こゝでは宜卿歿後の補写は宜卿の叔父であった日下部景衡が中心となったことが述べられている。「緑雲堂図書記」の長方朱印がある。

三　和漢年表稿本　　新井君美著　　自筆　　一冊　　五〇六・一三五

仲哀天皇元年（一九二）より天智天皇九年（六七〇）に至る年表。上部三段に『旧事本紀』・『古事記』・『日本書紀』を配し、下部二段には『魏志』以下中国の史書および朝鮮の『東国通鑑』から日本関係の記事を拾い出し、相互に対照できるようにしている。儒学者であると同時に歴史考証学者でもある白石は中国・朝鮮の歴史にも広く通じており、この年表においても、外国の史書と比較考証する白石史学の基本姿勢がよく示されている。また我国の三書中『旧事本紀』と『古事記』を重視した白石の態度がこれらの配列上に表わされていることも興味深い。年表・年代記の類は、歴史を論述するにあたり常に座右に置かれるもので、展示本は随所に白石の加筆訂正がなされている。

四　禁裏事載　　新井君美著　　自筆　　一冊　　五〇六・九六

六代将軍徳川家宣の侍講である白石は、家宣の外舅である近衛基凞の知遇を得て、公家関係の諸記録文献を見る機会が多く、大内図や行幸記を浄写することもあり、大内裏図の序文および跋語の草案を作成したりしている。宝永七年（一七一〇）一一月には、中御門天皇の即位の儀を、また翌正徳元年一月には元服の儀を拝観しており、その二年後の正徳三年二月に『御元服次第』を著している。展示本は、中御門天皇即位・元服の儀を拝観する際の手控を記したものであろう。内容は、親王・公卿・女院について語句の解釈、内裏御殿の名称、立親王次第（後水尾天皇皇子高貴宮＝霊元天皇）などである。白石は、この冊子を懐中して上京したのであろうか。巻頭に「白石」16、末に「君美」5の印がある。

五　本朝書目抄　　新井君美写　　一冊　　五〇六・八一

奥書に
庚寅(宝永七年)冬、於京師見得某蔵本本朝書目録、其書多」載君美蔵本書目所未載者、余暇抄出畢

とある。白石は中御門天皇即位式拝観のため宝永七年（一七一〇）一〇月上洛し、翌年正月まで滞在していた。本書はその間に見得した「本朝書目録」より、白石蔵本中に未載の書目を抄出したものである。白石がこれ以前に『本朝書籍目録』に接していたことは『同文通考』（展示本三）に同書が引かれていることから知られるが、本書はこれと体裁を同じくし、神事・帝紀・公事・政要等に分類し、白石が新しく知り得た書目を書き抜いている。中には『本朝書籍目録』に記載されている書名も散見されるが、主として同書成立以後室町中期頃までのものを多く含んでいる。

六　高倉家故実返答　　新井君美問　高倉永福答　　江戸末期写　　一冊　　二〇九・五一〇

正徳元年（一七一一）、白石は摂政近衛家凞に有職故実に関する質問をした。本書は巻末に「本書挾紙云、正徳元年(宋筆)辛卯夏、摂政殿より来る高倉家答」とあり、有職故実家の高倉永福の返答である。内容は、公家装束の個々についてその用法を主として説明している。将軍家宣の室は家凞の妹であり、白石も家凞とは親しい関係にあった。展示本は、松岡本であるが、巻末に「右正徳年中依新井筑後守源君美之問、高倉殿所答也。乞得于筑州之嫡孫源太郎邦孝、以写、明和八年(一七七一)辛卯五月、伊勢平蔵貞丈」とある。白石が公家に質問して成した著作には、他に『新野問答』・『新近問答』などがある。

七　殊号事略　　新井君美著　　江戸末期写　　一冊　　二〇五・二八六

白石は、天皇・国王に関し、いかに外交上表記さるべきかについて、正徳元年（一七一一）に『殊号事略』を著わ

した。この年、朝鮮使節を迎えて外交上の扱いに関する著書が多いが、本書は書式に関する彼の見解であり、将軍家宣の下問に応じて進呈された。白石の五事略の一つとして知られている。

八　決獄考　　新井君美著　　江戸中期写　　一冊　　二〇五・三二六

正徳元年（一七一一）、将軍家宣の進講を続けていた白石は、八月一七日にある疑獄事件の決裁について、将軍家宣から案を求められ、以後数回意見を陳述し、八月二六日に至って最終的な見解をまとめ、それが公的に採用された。本書はその白石の陳述である。決裁の内容は、ある女の父と兄とが共謀してその夫を殺したことを女が訴えた行為について、尊族告訴が罪となるかということである。先例・大学頭の判断によって、親不孝者として極刑に処せられるおそれがあったが、白石は無罪を主張、女を東慶寺の尼にした。『折たく柴の記』の下巻に、その次第が述べられている。

九　楽考　　新井君美著　　江戸中期写　　一冊　　二〇五・二七一

雅楽の各曲の由来を考証した白石の著作。成立年代未詳。豊原統秋撰『体源抄』を引くことが多いが、唐楽を壱越調・沙陀調・雙調・平調・黄鐘調・水調・般渉調・角調・道調・乞食調・性調の一一に分けていることや、曲の配列順等は、むしろ『和名類聚抄』に近い。白石が、宝永三年（一七〇六）家宣に『資治通鑑綱目』後唐荘宗紀を進講した際、家宣が殊に能楽を好むことを諷諫した書を奉ったことは夙に有名であり、『進呈案』・『楽対』・『俳優考』など、楽や散楽の故事・歴史等に触れている著作がこれであるという。展示本は、これらと同じ期のものという明徴はないが、白石の楽に対する見識が通り一遍のものではなかったことを示している。なお、当部には、白石が『体源抄』を抄出改篇した三冊本の『体源抄』（五〇六・一四一）も存する。

一〇　琵琶法師式目　　新井君美写　　一冊　　五〇六・一〇一

平曲の琵琶法師の系図・官位・法制・流派・年中儀式・罪科等を抜書したもの。『当道要集』からの抜き書きで、

冒頭の系譜は、同書の「系図之事」を、次の品階の事は、同じく「官位の次第」を写したものであるが、系譜後半の箇条書はかなり省略してある。「法之次第」・「年中の儀式」・「当道一宗六派之分」も、それぞれの当該分から抄写されたものであるが、特に「法之次第」と「年中の儀式」の抄出は簡略である。末尾の箇条書も、「法之次第」・「公事批判之次第」・「科行次第」からのメモ程度の抜き書きであるが、白石の興味の所在の一端を知ることができる。

二　職人尽絵三十二番　　新井君美写　　一冊　　二〇五・二六八

室町時代の成立といわれる『三十二番職人歌合』の絵の部分である。『三十二番職人歌合』は、三二種の職人達が、左右に分かれて歌を競い、その優劣を判者の勧進聖が定めているのを描いたものである。従って、本来ならば、それぞれの職人の絵の脇に詠まれた歌が記してある。家宣の命により、書籍を集め、書写し、調査したものの中の一冊であり、絵および職種名の文字ともに白石筆と思われる。巻頭に「天爵堂図書記」14、巻末「君美」4の印がある。

三　本朝画師　一名 住吉具慶法眼袖中抄　　新井君美写　　一冊　　五〇六・九〇

「土佐派の系図」・「同門弟」・「天子（以下）」・「婦人」・「巨勢派系図」・「上代画師」・「僧」等、各種の簡略な系譜を集めた小冊子で、巻末に「右一巻、住吉具慶法眼袖中抄也、庚子十一月十二夜、灯下写畢、源君美」とある。その後に、在上（『今昔物語集』巻二五の二抄）・頼寿両名に関する記事が補われている。庚子は享保五年（一七二〇）であるから、白石六四歳の写本である。「白石」17・「源堪之印」6の印がある。

三　画家系図　　新井君美写　　一冊　　五〇六・八九

「画家狩野系図」・「画家小伝」を合した小冊子であるが、朱筆の註記がある。白石の自筆で伝えられている画家

に関する図書は、この他に前掲の『本朝画師』（展示本一三）と、享保七年（一七二二）写の『画工便覧』一冊（五〇六・一一八）があるが、三部をまとめて見ると、当時の教養人の知識体系としてよいまとまりをなしているばかりでなく、相互に重複の無駄がない。画について白石が書き残した図書は、いずれも稀覯本である。「天爵堂」13の印がある。

一四　天文記　　宝永八写　　一冊　五〇六・一二五

『天文間日次記』または『天文間記』と称される本の抄出本。同書は一名を『興福寺蔵大般若経奥書抄』といい、天文一八年（一五四九）より同二四年の間、春日社般若屋において賢忍房良尊が書写した一筆大般若経六百帖の奥書中の雑記を集めたものである。良尊は一帖の書写を終える毎に和歌あるいは見聞した事柄等を記しているが、展示本はその中の合戦に関する記事のみを抄出している。白石が同雑記を見たのは宝永七年（一七一〇）一二月に奈良に赴いた際のことと思われ、同時に抄出を依頼したものであろう。

右南都興福寺賢聖院蔵本良（巻末白石自筆奥書）尊賢忍房手写大般若経一部、」毎巻後附雑記中所出也
宝永八年四月日鈔

巻頭に「天爵堂図書記」14・「晋伯」12印、巻末に「君美」4の印あり。なお、新井家本には、同時期に収書されたものとして『法隆寺文書抄』一冊（五〇六・九三）・『東大寺蔵文書』一冊（二〇五・三〇三）・『西大寺蔵本』三冊（二〇五・二八四）等がある。

一五　東福栗棘庵蔵花押　　新井君美写　　一冊　二〇五・二七三

京都東福寺の塔頭の一である栗棘庵に蔵されていた文書から二六顆の花押・印影を模写したもの。白石が家紋に精通していたことはよく知られているが、展示本は、白石の関心が花押・印にも向けられていたことを窺わせる。東京大学史料編纂所が収集した『栗棘庵文書』（影写本）には三種の花押が知られるだけであるが、このうち二種は白

石が採取した中に見える。宝永七年（一七一〇）の上洛時の作業であろう。なお、新井家本には、これに関連するものとして『東福寺蔵文書』一冊（五〇六・一二六）がある。

一六　住心院蔵古文書　　新井君美写　　一冊　五〇六・一三三

戦国および安土桃山時代の武将等の花押二〇顆と文書五通を模写したものである。文書の方の花押・印章もきちんと写しており、模写の時期および目的は、前掲『東福栗棘庵蔵花押』（展示本一五）と同じであろう。所収文書は

1、永正元年九月日薬師寺元一禁制
2、（年欠）七月十三日武田信玄印判状
3、（年欠）三月廿四日酒井忠次書状
4、（年欠）十月廿八日本多広孝書状
5、天正十五年九月晦日酒井忠次・本多広孝・二位法印如雪連署書状

の五通で、2以降は源氏、徳川家関係として文書内容まで収めたのであろう。住心院は室町時代、僧長乗が東山新熊野に開基した本山派修験宗の寺院で、勝仙院栂之坊と称した。東京大学史料編纂所蔵影写本『住心院文書』と合致するものは少い。

一七　秋野家旧記　　江戸中期写　　一冊　五〇六・一三六

四天王寺の寺司家秋野房所蔵文書を模写したものである。天正四年（一五七六）織田信長と石山本願寺の戦いで灰燼と帰した四天王寺を、秋野房亨順が豊臣秀吉・秀頼の援助を受けて再興し、その功により慶長六年（一六〇一）同寺惣別当職に任ぜられ、永代執行政所も認められた。本書はその事を示す同年天王寺寺僧中起請文をはじめ、万治二年（一六五九）までの秋野房宛の豊臣家老臣片桐且元、江戸幕府の老中・京都所司代・大坂町奉行等からの文書二七通を書写したものである。白石は宝永七年（一七一〇）冬、中御門天皇の即位式に関連して西上したとき、

大坂・奈良にも廻っていて、そのおりにでも四天王寺で本書所収文書を見せられ、豊臣氏、江戸幕府関係のものを書写させたものであろうか。本書表紙には「秋野家旧記写　乾」とあるところから、もと乾坤二冊あったものであろう。巻頭に「天爵堂図書記」14の印、巻末に「君美」4の印がある。所収文書数は二七通であるが、東京大学史料編纂所蔵影写本『秋野房文書』（六一通所収）にみられないものも多くある。

一八　永禄以来事始　　小瀬道喜著　　小瀬復庵写　　一冊　五〇六・一〇三

「永禄以来出来初之事」などの別名もあるように信長以降秀吉・秀次・家康・秀忠・家光の各代に始められた事柄のいわば初例集。他に各代の出頭衆の名も書き留められている。『信長記』・『太閤記』で有名な道喜（甫庵）の最晩年の著作。展示本は、原表紙に「数代出来初覚　小瀬甫庵草藁」とあり、巻末には白石が

右は甫庵曽孫小瀬復庵氏加州よりうつし給也
丁酉（享保二年）十二月廿八日に落手し誌ぬ　　白石君美記「君美」4

と識しているように、曽孫にあたる復庵が甫庵の草稿本を写して白石に贈ったものであることがわかる。なお、甫庵は本名坂井順元、桃渓と別号し、加賀藩の医師であると共に詩文家で、白石の母方の縁戚関係からか白石とは親交があり、『白石先生手簡』に両者の書簡が多数収められている。写本は、当部蔵『静幽堂叢書』・『古心堂叢書』・『遺老物語』所収の他二・三が知られるが、誤写脱字が多く、展示本は善本に属するものである。

一九　御当家御縁者記　　江戸中期写　　一冊　二〇五・二七八

徳川家康、秀忠二代の親類縁者記である。記者は不明。その範囲は祖父母、父母、夫人、子、兄弟姉妹、孫、曽孫、伯父母、甥姪、従弟に及び、重だったものには経歴が記されている。各代一巻をなし、おのおの次の本奥書がある。

（巻一）　右元和二年丙辰三月記之畢

（巻二）　右寛永八年辛未十二月記之畢

各日付は家康、秀忠が薨ずる一箇月前であって、本書成立の理由と関連があるであろう。類本に徳山毛利家旧蔵『徳世系譜実録』があり、これは家康から家継までで、内容は「御縁者記」である。このうち、家康・秀忠二代分を本書と比較すると、前掲の本奥書日付以降の記載があるほか、多少の出入りはあるが、ほぼ同じである。以上から、本書は徳川将軍家代々の縁者記あるいは系譜の祖型ともいうべきものであろうか。本文上部および行間に、『創業記』・『家忠日記』などによって附した白石による朱・墨の書入がある。各巻々頭に「天爵堂図書記」14の印があり、もと二冊を現在は合冊している。

三〇　諸家紋尽　　新井君美写　　一冊　五〇六・一一九

原表紙外題に「紋尽　全」とあり、展示書名で伝来されてきたが、武家家紋書として有名な『見聞諸家紋』と同本である。同書は、応仁の乱における東軍側の守護大名から国人層に至る諸家家紋の図形を見聞集録したものであるため、武家の家紋・故実研究の恰好の材料として多くの写本が作られ、また『群書類従』にも所収され流布している。このうち、白石写の展示本は、永正七年（一五一〇）の本奥書をもつ流布本の系統では最も古い写本であり、絵画にも堪能であった白石の筆になるだけに紋図形の精緻さなど内容的にも際立った善本といえるものである。元禄一一年（一六九八）、綱豊への「応仁の乱のこと」進講に際して使用したものと考えられる。巻頭に「天爵堂図書記」14の印がある。

（巻末本奥書）
永正七年庚午三月十七日於立雪斎書畢
（書写奥書）
源君美写　「君美」5

三一　後醍醐帝御物竹文台硯匣図　　新井君美写　　一冊　五〇六・一四〇

奈良県吉野の吉水院所蔵の後醍醐天皇が使用されたと伝える硯と文机の図を描いたもの。白石の時代は、南朝に関

心がもたれ、その研究が多く残されている。白石も南朝に対し深い同情と追慕を寄せていたことは『読史余論』（展示本三）からも知られるところである。宝永七年（一七一〇）、中御門天皇の即位式拝観のため上洛した白石は、一二月に奈良へ足を運んでおり、この図は、その際書写したものと思われる。吉水院は、後醍醐天皇が建武三年（一三三六）、花山院を脱出して吉野へ入り、まず行在所となった寺院である。印は「天爵堂図書記」14・「晋伯」12が巻頭に、巻末に「君美」4がある。なお、この硯と文机の図は、松平定信編『集古十種文房一』にも所収されており、有名なものであった。

三　善隣国宝記　釈周鳳編　明暦三年版　三冊　二〇五・二八三

前後三回僧録に任じ、『臥雲日件録』の記者としても名高い瑞渓周鳳（一四七三寂）が編した上代から室町中期に至る外交文書集。展示本は、「丁酉之春三月上澣」の跋をもつ明暦三年（一六五七）版で、『続群書類従』・『改定史籍集覧』所収の底本と同本である。本文に克明な朱点が施され、また枠外余白の所々に「美按」とした白石の書入れがある。巻末には

善隣国宝記三冊古本、蔵在東福寺中南昌院、院主」長老玄棟為予、校正朱墨一照其旧云、親自宝永辛卯（八年）孟春君美識于洛陽客舘

と白石の朱筆の識語があり、白石上洛中、東福寺南昌院蔵の古本をもって院主松陰玄棟（東福寺二四五世）が白石のために親しく自ら句読の便のため朱筆を加えたものであることが分かる。上巻巻頭に「天爵堂図書記」14・「玉縄」3、中・下巻巻頭に「君美」5・「一字在中」1、下巻巻末に「白石」15・「君美」5の印がある。

三　定西法師琉球話　合綴　韃靼漂流記　日下部景衡写　一冊　二〇五・三一一

日下部景衡が編した『唐人毛止利』から景衡自身がその序および掲出二篇を抜書したもの。「一、定西法師琉球国

物語、一、越前国新保村之者犍狙へ吹流れし口書」と目次を書き、つぎに

伊万里の焼物を唐人求得て帰国し、赤絵など」入、又吾国へ持渡りしを、俗に唐人もどりといふ、」此書漂舶せしもの共の帰りての口状書を見し」度毎に、余数十之内写し置しを冊となして、唐人」毛止利（モトリ）と題す

朝倉日下部景衡（印）

と序文を写し、「定西法師伝」（内題）、「韃靼漂流記」（内題なし）の二篇を収める。前篇は元和年中に江戸に居た定西という僧が、若い頃各地を転々とし琉球にまで行った話で、本文初に「護杜」・「鳴鶴堂蔵書印」の印、文末に「正徳二壬辰霜月下旬灯下書写之、日下部景衡」の書写奥書がある。後篇（展示本三四参照）には印記、奥書等はないが異本による校合が補されている。日下部（朝倉氏）景衡は、白石の妻の弟で、『新井白石日記』中では始め余三、後に孫右と見え、引越の手伝い等内輪の仕事によくたずさわり、書をよくし、白石のために浄書も行っている。号南山。

三四　韃靼漂流記　一名　越前三国浦記　　新井君美写　　一冊　　五〇六・一二二

寛永二一年（一六四四）四月、越前国新保村の国田兵右衛門・宇野与三郎らが三国浦から松前に向けて三隻の船で出帆したが、嵐に遭って、韃靼（中国東北部）に漂着、韃靼の都奉天から北京・南京に護送され、朝鮮を経由して二年後に帰国した。本書はもとその取調書であったが、好事家の手で筆写され、「韃靼漂流記」として流布した。清朝南進直後の各地の風俗が記録されていて、興味深い。白石は本書を精読したらしく、所々に朱註を試みている。表紙に「越前三国浦記」とあるのも、自筆かと思われる。「天爵堂」13の印がある。展示本三三の後篇と同一書であるが、両者の関係は明らかではない。

三五　乗槎　附　寛文十三年蝦夷国風書付　　新井君美写　　一冊　　五〇六・九四

乗槎とは、イカダに乗るの意か。清の斌椿に『乗槎筆記』の著があるが、別本である。巻頭に「播州高砂船頭町徳

兵衛再渡天竺事記」とあるのが、内容をよくまとめている。架空の説であろうが、いわゆる天竺徳兵衛の物語の出典になる。附の方は、松坂の七郎兵衛等がエトロフ・クナシリまで流されて放浪した見聞記。いずれにも白石の註記がある。

二六 蝦夷志　新井君美著　江戸中期写　一冊　三五〇・三三七

和書・漢籍に基づいて蝦夷地の部落名・形勝・山川・風俗・物産について、蝦夷・北蝦夷・東北諸夷にわけて詳記細註し、風俗図を附している。巻頭に享保五年（一七二〇）正月の白石の序、文末に「明和五年戊子夏五月、黄世廉識」の識語をもつ。展示本は鷹司家本で、「鷹司城南館図書印」・「青木蔵書」・「青元武印」・「子正易」の印がある。

二七 南島志　新井君美著　江戸中期写　一冊　二〇五・三一〇

白石は、元禄八年（一六九五）正月一五日に、前年に綱豊に献上された、朝鮮・地球・琉球の図に対する「考」を呈している。以後白石と琉球とのかゝわりは深く、宝永七年（一七一〇）一〇月八日琉球への復書の草案を進め、同年一一月一八日将軍琉球使引見、翌正徳元年正月八日には、伏見において琉球の二王子と対談、正徳四年（一七一四）一二月二日琉球使引見の後、同月一八日にも島津吉貴邸において琉球使と対談している。このような琉球に関する知識を基に記されたものが、展示本と和文の『琉球国事略』の二書である。本書は、享保四年（一七一九）の成立で、展示本二六の『蝦夷志』とあわせて「南北倭志」とも呼ばれている。内容は、「地理・世系・官職・宮室・冠服・礼刑・文芸・風俗・食貨・物産」の一〇項目に分けて詳述されている。

二八 采覧異言　新井君美著　江戸末期写　二冊　二〇五・三一六

『西洋紀聞』と並ぶ白石の名著で、鎖国下の万国地誌である。書名は序によると、異人の言を采覧して成った意で

あることが分かる。宝永六年（一七〇九）家宣の命をうけ、ヤソ会士シドッチを審問し、官庫に蔵されているマテオ・リッチの『万国輿地全図』のオランダ版によって異人に糺した所を参考し、明人の訳語を参酌して、正徳三年（一七一三）に成った。展示本は、巻頭に「天爵堂図書記」、巻末に「一字在中」、序末に「泉」・「原君美印」・「紫陽」の印が丁寧に写されており、白石蔵本から直接に書写した善本であることが分かる。

二九　万国集説　　新井君美写　　一冊　五〇六・一三一

マテオ・リッチ著の『山海輿地図説』と『万国全図(説)』を合冊したもので、いずれも世界各地に関する短かい記事からなっているが、地図は無い。前者に「万暦壬寅(三〇年)孟秋吉日、欧羅巴人利瑪竇謹誌」とある。リッチ（一五五二～一六一〇）は、漢名利馬竇と言うイタリア人のヤソ会士で、中国におけるキリスト教の伝道とヨーロッパの学問、特に天文・地理等の移植に尽力した人物として名高い。「天爵堂図書記」14・「君美」4の印がある。

三〇　図書編　　新井君美写　　一冊　五〇六・一二四

本書には「輿地山海全図叙」以下の地理・地図関係、「唐虞夏商周譜系図」以下の系図関係、及び「五岳真形図」が収められている。うち地図・地理関係と「五岳真形図」は、明の章潢が編した図譜の集成『図書編』（全一二七巻）の巻第二九と巻第五九の抜書であり、系図関係は同書の巻第七七・七八からの抜書きである。地図の書写は、明版からは考えられないほど鮮明である上に、色分けでさらに見易くなっている。「天爵堂図書記」14・「源瑛私印」8・「躬自抄録」2の印がある。

三一　同文通考　　新井君美著　　宝暦一〇年版　　四冊　二〇五・二六九

和漢の文字や仮名の字源と沿革について述べた、白石の代表作の一つで、宝永二年（一七〇五）の著作。白石の歿後、加賀藩儒新井白蛾（一七二五～九二）が補校して四巻とした。白蛾による序が附されている。巻末に「宝暦

(一七六〇)十庚辰年九月、大阪高麗橋壱丁目、吹田屋多四郎繡」とあり、扉に「浪華書林、梧桐館梓」とある。「源成美印」の方朱印があるが、これは白石の曽孫新井成美の印であろう。

三三　三韓詩亀鑑　　新井君美写　　一冊　五〇六・一一〇

本書は朝鮮の趙云仡の撰著になる。趙云仡については巻末に「石澗、豊壌県人、仕于高麗王為諫議大夫、李氏当国又仕朝鮮、授江陵府使郎、以病辞帰広陵為荘」と註記されている。別に『石澗集』という著書によって知られる詩人であった。本書は我が国でも元禄一一年（一六九八）に版本になっていて、広く読者をもったであろうことが察せられるが、白石の関心が朝鮮の古詩に及んでいたことが、この写本によって示されている。「天爵堂図書記」14・「君美」5・「一字在中」1の印がある。

三三　五色筆　　新井君美写　　二冊　五〇六・一一三

旧表紙に白石の自筆で「詩話」と書かれているように、一種の詩話集である。各話末に「斉東野語」とか「癸申雑識」などの出典註記が見られるが、序も識語もなく他に伝存のあることも聞かないので、如何なる人の撰になる詩話であるか分からない。唐・宋の詩に関する話柄が多いが、まま元・明時の人名のものも見うけられる。

三四　天爵堂寿詩　　江戸中期写　　一冊　二〇五・二五七

白石は五〇歳の宝永三年（一七〇六）春、諸友門弟を集めて寿筵を開いた。『天爵堂寿詩』は、その折の献詩二九首を集め、末尾に白石の自寿詩を置いて上巻とし、白石の和詩を集めて下巻としたもので、次男新井明卿の彙輯になる。序文は無い。版行されたかどうか定かでないが、版本を意識して謹写しており、かつ下巻に補正が認められるので、あるいは版下として作成されたのではないかと思われる。

三五 荀子　新井君美写　六冊　二〇五・二五二

性悪説で著名な周の荀況撰、唐の楊倞註。わが国で『荀子』が刊行されたのは延享二年（一七四五）であり、白石の歿後二一年にあたる。それ以前は、明版の諸本が通行していた。白石の写本は、当部蔵の明末版四冊本（一一三・二九四）と対比すると、序と本文と楊倞の割註と上欄の墨書註記の部分が一致するから、底本の一つはほぼこれに拠ったと思われるが、目録の書式が一致しないので、断定できない。朱書部分は、詞・章・篇に関する詩文評であるが、篇末の評と上欄・傍欄部分の評に分かれている。評者は、前者では孫鑛と劉辰孫、後者では孫鑛と劉辰孫と王納諫であり、大尾に「墨書蓋係于王納諫評閲、朱書係于錢受□訂本也」とある。「天爵堂図書記」14・「君美」5・「一字存中」1の印がある。

三六 遵生八牋抄　新井君美写　一冊　五〇六・八八

明の高濂撰『遵生八牋』の第一四～一六「燕間清賞」からの器物についての抜書と、第七・八「起居安楽牋」からの怡養具・遊具についての抜書から成る。「論古銅色」・「新旧銅器弁正」・「論宣銅倭銅炉瓶器皿」・「論漢唐銅章」・「刻玉章法」・「論官哥窯器」・「論定窯」・「論諸品窯器」・「論饒器新窯古窯」・「論剔紅倭漆雕刻鑲嵌器皿」（以上「燕間清賞」上）・「圧尺」（以上「燕間清賞」中）・「瓶花之宜」・「瓶花之忌」（以上「燕間清賞」下）・「袖炉・禅灯・聖灯方・畳卓・提盒・提炉」（以上「起居安楽牋」下）・「茶寮」（以上「起居安楽牋」上）の各項がある。その中、陶器と漆器に関する部分は別筆である。巻頭に「勿斉」9巻末に「君美」5・「躬自抄録」2の印がある。

三七 多識篇 七巻　新井君美写　二冊　五〇六・一一五

『多識篇』は、明の林兆河が『詩経』の名物を詳細に説明した著作である。白石がたんなる作詩家の域に止まらず、漢学の中で特に『詩経』を撰んでこれを正面から理解しようとしていたことは、注目されなければならない。

白石は『詩経』を綱豊に進講しており（展示本三八）、本書の書写もあるいはこれに関連するのであろうか。「天爵堂図書記」14・「君美」5・「一字在中」1・「玉繩」3・「参」等の印がある。

三八　詩経図

新井君美筆
狩野春湖画

五帖・一冊　四五〇・七

元禄七年（一六九四）、三八歳の白石は日々桜田門外の甲府宰相邸に出仕して、綱豊に『詩経』を進講した。『折たく柴の記』によると、二月一三日から一一月二〇日迄一六二日にして功終る、とある。甲府徳川家附きの画師狩野春湖に描かせて、前もって絵を内覧に供し、講義はもっぱら詩意に限った。展示本がその図集で、目録は白石の自筆である。図柄の決定は白石の見識により、その範囲は鳥獣草木の外、鱗・犠尊などの器物にまで及ぶ。しかも、鳥獣草木で我が国に無いものは長崎まで求め、実物・写生画も取り寄せている。狩野春湖は、狩野派の宗家である中橋狩野家永真安信の門人。『寛政重修諸家譜』巻第一二一八によると、『詩経図』一箱が白石の曾孫成美の養子抱義の手によって幕府に献上されたのは、寛政七年（一七九五）一〇月二六日であった。「秘閣図書之章」の印あり。

三九　新井白石像

江戸末期写

一鋪　二〇八・二二

数種ある白石画像のうち、自画像の伝えもある従五位下筑後守の正装で、正徳三年（一七一三）正月付の深見玄岱の賛のあるものの模写。江戸末期の有職故実家松岡辰方の集書の画像類の一。裏に朱筆で「新荒井白石　卅」とある。原本は新井家に現存するが、展示本の賛は原本と書式を異にし、誤字、脱漏がある。因に正徳三年は白石五七歳。なお、深見玄岱（高天漪）は儒者・書家として名高く、白石と親交があり、その推挙で幕府へ出仕した人。参考までに原本の賛を掲げておく。

筑州源美公像賛　二則

誰道是白石、礹々不可磨、誰道是非白石、磊々不可転、眉間火字、耳上一毫、両目流光礸礪、一機応変縦横、

不然、韓客殿上、争得使渠従容斂手、不砕頭柱乎、而乃其人之言曰、日出之邦源大官、骨清気豪身桓〻、胸中壮略竜虎祕、筆下文章星斗蟠、可謂国家之爪牙、万里折衝之臣矣、腰下秋水、端従
上賜、身上水干、摂籙所贈、踞乎皐比之上、傲睨日月之表、口津〻腹便〻、天下枢機、参乎其間、推誠及物、拯済万人、神化丹青、渾成儀表、将歴百世而真宰、儼然不可奪者歟、癸巳(正徳三年)正月、通家弟高岱拝題